

“生化学若い研究者の会”の活動の意義 ～第50回夏の学校を目前にして～

飯島 玲生 (大阪大学生命機能研究科, 生化学若い研究者の会代表)

1961年7月, 群馬県の赤城山で90名の若手研究者が集まり, 「第1回夏の学校」が開催された。この夏の学校を開催した“生化学若い研究者の会”(生化学若手の会)は, 1958年の札幌での日本生化学大会の自由集会“若い研究者の問題”の後に, 研究の困難な状況や苦しい立場の解決策を模索するために結成された全国的な強い組織である(生化学, 311, 30, 1958)。そして, それから49年が経過した2010年9月, 神奈川県箱根高原にて, 「第50回夏の学校」が開催される。生化学若手の会は次々と入れ替わりがある学生主体の集まりにも関わらず, 50年以上もの間, 維持されてきた。これは, 研究者世界において生化学若手の会の活動が作り続けてきた若手研究者同士の交流の場が必要とされ続けてきたからであろう。

限られた研究者のポストに就くために, 世界に通用するようなトップクラスの研究が求められる一方で, 最近では一般社会から科学研究の必要性が問われるようになってきた。そうした中で, 生化学若手の会は, 最先端の研究動向を知り, 様々なバックグラウンドを持つ研究者と研究交流をする場を作ることで, 科学研究における自由な創造の場を作ってきた。また, 研究者を取り巻く様々な問題を共有し, 議論する場を作ることで, 若手の時から科学研究のみならず科学が関わる社会問題についても関心を向けてきた。このような活動が継続してきたのは, これまで運営に関わった歴代の有志の大学院生が, そうした科学研究の創造の場, 社会問題の議論の場の重要性を実感していたからであろう。本稿では, 50年以上に渡って続いてきた生化学若手の会の活動を以下のように4つに分けて紹介するとともに, 生化学若手の会の活動の意義について考えてみたい。

(1) 夏の学校

生化学若手の会最大のイベントが「夏の学校」である。現在は, 学部生から研究員まで, 全国から総勢150名を超える若手が集まって, 合宿形式の研究会が行われている。夏の学校では, 大学や企業の第一線において活躍する講師による講演会を通して最先端の研究動向を知るとともに, 研究交流会を通して若手研究者同士が交流することを目的としている。夏の学校で扱う分野や参加者のバックグラウンド

は, 発生生物学や神経生理学を始め, 免疫学, 園芸学, 精神医学にいたるまで, 非常に幅広いことが特徴的である。この生化学若手の会の幅広い分野の交流をきっかけにして, 共同研究を始めたという生化学若手の会のOB, OGは少なくない。

また, 夏の学校の中で開催されるシンポジウムでは, 参加者全員が一堂に会し, 複数の講師の講演を通して科学が関わる社会問題について議論をする企画が開催されてきた。1960年代にはオーバードクター問題(学位取得後の研究ポストがない)や大学間格差の問題について取組み, 1970年代からは婦人研究者を扱う企画が増え, 1980年代には他分野の若手研究者との連携を行いオーバードクター問題に取り組むなど, それぞれの時代に即した問題について議論を行ってきた。こうした問題について, 若手の時から関心をもち, 問題意識を持っておくことは, 将来科学の世界で職を得た時に有効になってくることが考えられる。例えば, 1958年の本会結成の時の発起人である吉川寛先生(大阪大学名誉教授, 奈良先端科学技術大学院大学名誉教授)は1977年から生化学会のオーバードクター問題専門委員会の委員長を務められている(Biochemistry Today and Tomorrow, Vol. 6 臨時増刊)。

(2) 支部活動

生化学若手の会には, 北海道・東北・関東・名古屋・北陸・京都・中国四国・九州支部の8支部がある。現在, 九州支部の活動は休止しているが, 他の支部では, 講師を呼んだセミナーや若手研究者間の研究交流会を実施している。若手研究者同士の新たな交流が生まれるのは主に夏の学校であるが, その後参加者が各地域に戻った後にも支部活動によって, その交流が維持されている。また, 全国各地で開催される学会等において, その地域の支部が中心となって夜の交流会を企画することで, 全国の若手研究者との交流関係を維持するというも行っている。

(3) キュベット委員会の活動

「若手研究者の意見を一般社会に発信すること」を理念に, ライティング活動を行っている。生化学若手の会は,

1966年から『蛋白質核酸酵素 (PNE)』(共立出版)にキュベット欄という誌面を併設し、40年以上にわたり活動を継続してきた。その活動を担ってきたのがキュベット委員会である。現在では、『実験医学』(羊土社)「オピニオン」コーナーに誌面を移し、寄稿を継続している。また、2010年6月には『Rikejo』(講談社)のサイエンスコラムを担当している。キュベット委員会は、過去には古くはオーバードクター問題や、女性研究者の待遇改善について訴え続けてきた。また近年は本誌のみならず、若手の情報発信を担う立場として新しい活動にも挑戦している。最近では科学コミュニケーションや理科教育問題などにも活動を広げ、2009年4月には、『光るクラゲがノーベル賞をとった理由—蛍光タンパク質 GFP の発見物語』を出版した。今後も若手の情報発信を担う立場として、有意義な発信を続けていく。

(4) その他の活動

最近では、研究会や夏の学校の運営、ライティング活動を通して身につけた力を生かして、生化若手の会として様々な活動を行っている。2009年の第82回生化学大会では、生化学会の支援のもと若手研究者のキャリアに関するフォーラム企画を行い、第32回分子生物学大会では Dry と Wet 研究者の共同研究に関するサテライトシンポジウ

ムを開催した。また、2009年の行政刷新会議の事業仕分けに対しては、他分野の若手研究者と連携をしながら、「21の若手の会の共同声明」を作成し、文部科学省関連部署、政府関係者に送付した(毎日新聞社、2009年12月15日夕刊)。他分野の若手の会とも連携をとっており、2010年3月には「若手研究者合同合宿」を開催し、普段は会うことのない若手研究者同士が科学研究の意義について意見交換をする機会を設けた。実際、科学研究を行いながら、科学に関わる社会問題に関する問題について継続的に活動を行っていくことは難しい。しかし、生化若手の会を通して知り合った若手研究者同士で、意見交換をすることの重要性を感じて活動を行っている。

最近、生化若手の会は全国の多様な生命科学分野の若手が集まる組織として、再び活性化している。現役の生化若手の会の若手研究者は研究交流という創造の場において、自由に科学研究に関する議論を行いながら気持ちを高揚させる一方で、科学研究を取り巻く環境についても目を向け、科学に関わる社会問題について共有し、議論していただろう。私たちもまた、歴代の先輩方と同じような、“生化学若い研究者の会”の活動の意義を感じていると想像すると、感慨深い。

年	過去の活動
1958年	生化学若い研究者の会(生化若手の会)を結成。
1961年	第1回夏の学校(赤城山90名)を開催。
1966年	「蛋白質核酸酵素(PNE)」にキュベット欄開設
1980年	「OD問題の解決をめざす若手研究団体連合会」を結成。 オーバードクター問題に若手で連携して取り組む。 (生化若手, 物性若手, 生物物理若手, 天体・天文物理若手, 原子核三者若手などが参加)
年	最近の活動
2008年	第81回日本生化学会大会・第31回日本分子生物学会にて(BMB2008), 創立50周年記念シンポジウム, 祝賀会開催
2009年	「光るクラゲがノーベル賞をとった理由—蛍光タンパク質 GFP の発見物語」(評論社)を出版
2009年	行政刷新会議の事業仕分けに対して, 「21の若手の会による共同声明—知の継承と未来への投資—」を発表。
2009年	第82回日本生化学会大会にて, フォーラム企画: 「研究を楽しむ~博士取得後の若手研究者のキャリアパス~」を開催。
2009年	第32回日本分子生物学会にて, サテライトシンポジウム: 「どうやる? 共同研究—若手で模索する, これからの Wet と Dry の共同研究の進め方」を開催。
2010年	湘南国際村センターにて, 若手研究者合同合宿を開催。 研究者を取り巻く環境について, 複数分野の若手研究者で議論を行った。 (生化若手の会, 生命情報科学若手, 天体・天文物理若手, 0 to 1の各団体の有志が参加)